



ゲオルク・フォルスター(1,2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 船越, 克己 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006007

ゲオルク・フォルスター (1, 2)

船越克己

ゲオルク・フォルスター(1754-94)は波瀾の多い生涯を異郷の地パリで閉じた。いったいゲオルク・フォルスターという男は何者なのか。じつはこの男には恰好のレッテルが付けられている。いわく、キャプテン・クックの第2回世界周航探検(1772.7.-75.7.)に父ラインホルト・フォルスターとともに参加し、後年フランス革命の思想に共鳴して、ドイツを裏切り、ライン地方の一部をフランスに譲渡したドイツ人である、と。このレッテルはいわばゲオルク・フォルスターの栄光と墮落を簡明に語る検索語として、当時から今日に至るまでその神通力を失っていない。もしかしたらそのレッテルはこの希有な人物を忘却の淵に沈めてしまわないための必要手段であったのかもしれない。事実、イギリスの大航海政策とフランス革命は近代社会の確かな始動のメルクマールであり、18世紀後半における最大級の世界史的イベントであった。この特筆すべき二つの事件に直接かかわった人物はゲオルク・フォルスターをおいていない。わたしがフォルスターの小伝を執筆する理由は、ドイツ文学史上マイナーな作家の位置に甘んじているこの人物を正当に評価するきっかけを作りたい、などという大それた意図に由来しない。先述したごとく、フォルスターという人物は何者なのか、という問いに自分なりの解答を考えてみたいからである。そのさい、何はともあれ、フォルスターに対する過大なし過小評価、あるいは部分的拡大は回避しなくてはならない。このような態度でフォルスターに接近するには、伝記的叙述がかなり有効であるように思える。そのような次第でわが浅学非才を顧みず、諸賢に教わりつつ、フォルスターの生涯をなぞることとする。

1

ヨハン・ゲオルク・アーダム・フォルスター、すなわちわれわれのゲオルク・フォルスターは1754年11月27日、ダンチヒ(現在のグダニスク)から南東数キロの位置にあるナッセンフーベンという村で、父ヨハン・ラインホルト・フォルスター(1729-98)と母ユスティーネ・エリーザベト・フォルスター(旧姓ニコライ、1726-1804)の間に長子として生まれた。

生まれ故郷の思い出を語ることの少なかったゲオルク・フォルスターであるが、一度その地に言及したことがある。それはかれが38歳の誕生日を迎える直前であった。それはマインツにあって、いわゆるジャコバン・クラブに加入し、ドイツ最初の共和国樹立のために決定的な一歩を踏み出した時点でもあった。「善良なプロイセン人」であって欲しい、と懇願する友人クリスティアン・フリードリヒ・フォスにフォルスターはつぎのように厳しい返答をした。

ぼくはダンチヒから1時間ほどのポーランド領プロイセンに生まれましたが、ぼくの出生地がプロイセン王国の支配下に置かれるまえに、そこを離れました。だからそのかぎりではぼくはプロイセンの臣民ではありません。ぼくは学人としてイギリスで暮らし、世界周航をしましたが、その後カッセル、ヴィルナ、最後にマインツでぼくのささやかな知識を伝達

しょうと試みました。生活していたそれぞれの場所で、ほくは善良な市民になろうと努めました。生活していた場所で、パンのために仕事をして、それを受け取りました。(1792.11.21.)

ゲオルク・フォルスターにとって生まれ故郷であるポーランドの寒村は、自由・平等・博愛を実現したフランス共和国に敵対するプロイセンとは別の土地であった。フォルスターは自己のアイデンティティをプロイセンのなかに認めない。それぞれの仕方で仕事を成し遂げた地、それがフォルスターの存在を証明したのである。

ゲオルク・フォルスターがナッセンフーベンの村で過ごした年月は10年余りであった。二度とこの村に戻る事のなかったゲオルクであったから、かれの系図を一瞥し、かれの定位置を確認しておくことも無駄ではないだろう。とりわけ父の影響なくしてはゲオルクの生涯はなかったとも言われるフォルスター家の事情を顧みるならば、いっそうその必要性は増すように思われる。

オリヴァー・クロムウェル(1599-1658)の時代のヨークシャーにフォリスターという名前の地主一族が住んでいた。かれらの先祖はその昔スコットランドにいたという。プロイセンのフォルスター家の始祖ジョージ・フォスター(George Forster)はかかるヨークシャーの地主の一人であった。かれはチャールズ1世(在位1625-49)を支持する王党派運動に加わった。

しかしクロムウェル軍の勝利はジョージ・フォスターの財産を略奪にさらした。やむなくかれはイギリスを去り、着の身着のままダンチヒに上陸した。1642年頃と推定される。やがてかれはダンチヒを去り、ヴィスラ河畔の町ノイエンブルクへ移住する。そこにはスコットランドから逃げて来た多くの移住者が行商などで生計を立てながら、苦境の淵からはい上がろうともがいていた。逆境にもめげずジョージ・フォスターは穀物商人として地歩を築き、ついに市民の身分を獲得し、カタリーナ・ライトを妻に娶った。彼女も同じくスコットランドから移住して来た家族の出であった。

この婚姻から長男アーダムが生まれた。アーダムの二度目の妻カタリーナ・ガレスキーはダンチヒから90マイル南方にある町デイルシャウ(現トゥチェフ)の商人の娘であり、ガレスキー家もまたスコットランドからの移民の家系に属する。アーダムは父の職業を継いで商人となった。1666年アーダムはかれの家族をつれてデイルシャウへ移住した。ところでデイルシャウの名が初めて記録に現れるのは1198年のことである。その後、数世紀しばしば略奪にさらされたが、1660年スウェーデンとポーランドの間に和平が締結され、この町はポーランド王室の領地となった。商業も繁栄を取り戻した。アーダムをこの町に引きつけたのもそうした魅力であったろう。かれはやがて相当な財産を取得した。ノイエンブルク生まれの2人の子供に、デイルシャウ生まれの6人の子供が加わっていた。

アーダムはデイルシャウの市長になり、亡くなる(1700年頃)までその職を務めた。その長男ゲオルク(1663-1726)はノイエンブルクで生まれている。ゲオルクも1702年に市長に選ばれ、父と同様、死ぬまでその職にあった。かれは二度の結婚を経験した。最初の妻との間に生まれた長男がゲオルク・ラインホルト(1693-1753)であり、ヨハン・ラインホルト・フォルスター(1729-98)の父である。ゲオルク・ラインホルトはダンチヒとケーニヒスバルクで学んだ後、デイルシャウへ戻り、市の書記や公証人の仕事に就いた。1727年、かれはデイルシャウの市長の娘、エーファ・ブラートと結婚した。エーファは未亡人であった。この婚姻はフォルスター家に社会的名望をもたら

した。ゲオルク・ラインホルトもデイルシャウの市長となった。つまりフォルスター家では3人目の市長というわけである。市長に就いた翌年の1734年、デイルシャウの町はロシア軍に包囲されたが、ゲオルク・ラインホルトは危険を顧みず精力的に活動した。その後遺症として麻痺が生涯残った。

ヨハン・ラインホルト・フォルスター、つまりわれわれのゲオルク・フォルスターの父は1729年10月22日にデイルシャウで生まれた。そのとき両親の年齢は父37歳、母36歳であった。父の身体は不自由であり、町は戦さのため不穏な状態が続いたため、ラインホルトの幼年時代は幸福ではなかった。一時期、かれは母方のおじの農家に預けられている。戦時中の父の毅然たる態度そして農場での体験は少年に独立自尊の精神と自然に対する愛情を育んだ。付度すれば、後年激しい気性のために職場の周囲と絶えず衝突したといわれるラインホルトの性格はその幼年時代に深く根差していた。14歳でかれはデイルシャウの南、マーリエンヴェルダーのギムナジウムへ入れられた。自分自身では一人息子の教育に直接当たれなかった父ゲオルク・ラインホルトではあったが、息子の進路に対する権利はそれを強力に行使した。当のラインホルト・フォルスターが息子ゲオルク・フォルスターの幼少教育に精力を注いだ事実も、フォルスター家独特の現象の一つであった。

文学史家ゲオルク・ゴットフリート・ゲルヴィーヌス(1805-1871)によれば、ラインホルト・フォルスターは幼少の頃から父ゲオルク・ラインホルトによって早期教育に駆り立てられ、6歳にしてポーランド語、ラテン語、ドイツ語を話した。それゆえラインホルトにとって後年、17か国語を習得することは容易であったという。おそらくこの語学能力はポーランド人、ロシア人、ドイツ人が日常的に接触する生活圏に身を置くラインホルトに幼年時代から備わっていたのである。すでに見たように、先祖伝来フォルスター家は異文化を体験しつつ、繁栄を遂げてきた。後年ラインホルトは友人ヨハン・ダーヴィト・ミヒャエーリスにつぎのように書いている。「わたしたちはほとんど英国人であります。以前ポーランド領であったプロシアの辺境に生まれたとはいえ、少なくともドイツ人ではありません。」(1775.8.24.)ちなみにフォルスター(Forster、ときとしてFosterと記される)という姓はフォリスター(Forrester)の訛りである。われわれのゲオルク(Georg)も自分の名前をイギリス風にジョージ(George)と綴ることもあった。

閨秀作家イーナ・ザイデル(1885-1974)は彼女のゲオルク・フォルスター伝『迷宮』(1922)のなかで、5歳に満たぬゲオルクが文字を覚えたがため、「父の書齋で」過ごすことを強制される次第を伝えている。父ラインホルトが自己の教養の鑄型に息子ゲオルクをはめ込み、息子の将来に自己の希望を託す傾向はすでにこのときはじまっている。いったいわれわれのゲオルクの父はどのような環境で育ったのであろうか。

ヨハン・ラインホルト・フォルスターは1745年5月から48年4月までのまる3年間、ベルリンのヨアヒムスタール・ギムナジウムで学んだ。このギムナジウムは1607年ブランデンブルク選帝侯ヨアヒム・フリードリヒ(1546-1608)によってベルリン郊外のヨアヒムスタールの地に王侯学校として設立されたが、1647年ヨアヒムスタール・ギムナジウムとしてベルリンへ移転してきた。ラインホルト・フォルスターが入学した頃、このギムナジウムは名声を博していた。特に神学を学ぼうとする若者たちにとって、それは絶好の修練の場であったという。ラインホルトに大きな影響をおよぼした教師がそこに2人いた。校長ヨハン・フィリップ・ハイネ(1688-1775)とフ

リードリヒ・ムーツェル (1684-1753) である。前者は神学、古代ヘブライ語、古代ローマ、哲学、キケロを講じ、後者は政治史、文学史、ラテン語、また物理の伝導実験も教えた。ラインホルトは古典語、聖書関連語にすばらしい進歩を見せ、古典文学を非常に好んだ。

ラインホルトは在学中、学外に多くの友人をもっていた。とりわけ学者一家のパラス家との交際はかれにハレ大学医学部で学ぶ意欲をかき立てたという。学友ではまずカール・ゴットフリート・ヴォイデ (1725-90) を挙げねばならない。ヴォイデはベルリンで宮廷説教師クリスティアン・ショルツ (1698-1777) の影響を受けた。ショルツはコプト語・ラテン語辞書の仕事をやっており、ラインホルトはヴォイデを通じて古代エジプトのコプト学に関心をもつようになる。2人の友情はその後も途切れることなく、後年ロンドンでかれらは隣人として暮らす運命にあった。

ラインホルト・フォルスターは1748年の春、ベルリンのギムナジウムを卒業した。もともと神学を志していたが、しだいにハレで医学を学びたいと思うようになった。ベルリンで自然史に興味をもち、その研究を継続するには医学部が最良の場だと考えたわけだ。しかしディルシャウの上流社会に地位を占めるフォルスター家にとっても、医学部の学費は余りにも高額であった。それゆえラインホルトの父が息子に法律を学ばせ、ディルシャウで市役所の仕事にでも就かせようともくろんだのも、無理からぬ話である。というわけでラインホルトが神学部を選んだのは父の希望との妥協の産物でしかなかった。1748年4月14日、息子はハレ大学神学部に入學した。

1694年に設立されたハレ大学は法学者クリスティアン・トマージウス (1655-1728)、哲学者クリスティアン・ヴォルフ (1679-1754) など錚々たる教授陣を誇っていた。しかし合理主義哲学を説くヴォルフが国外追放の憂き目に会ったのち、大学は早急にはその痛手から回復できず、ドイツにおける指導的、啓蒙的大学の地位をゲッティンゲン大学 (1737年設立) に譲らねばならなかった。ハレ大学医学部はドイツで最初の医学部ではあったが、ヴォルフを失った大学の斜陽化に逆らうことはできなかった。ラインホルト・フォルスターはハレ大学でこつこつと博物学の勉強をつづけた。ヴォルフの後継者である数学者ヨハン・ヨアヒム・ランゲは時どきリンネの分類法の講義をしていた。ランゲはリンネの『自然の体系』第3版をドイツ語に翻訳していた。ラインホルトはランゲから博物学を学んだ。こうしてかれは利用できる範囲で好きな学問に耽っていたのである。

われわれはラインホルトがハレ大学を去った時期を正確には知らない。しかし1751年7月初めにはかれはダンチヒで聖ペテロ・聖パウロ教会の改革派集会の牧師補となっている。1753年8月、ラインホルトはケーニヒスベルクで牧師職を授けられ、同年9月23日にナッセンフーベンの説教師に就任した。ラインホルトにとっても、われわれのゲオルク・フォルスターにとっても、一つの思い出の地となるナッセンフーベン村について、多少触れておくことにする。ナッセンフーベンはヴィスラ川の支流モットラウ川の右岸にある村で、左岸のホッホツァイト村とともに、改革派のホッホツァイト・ナッセンフーベン教区を形成する。ポーランドの町リッサの説教師ヴォイデ宛のラインホルト・フォルスターの手紙 (1756.1.16.) によれば、1630年頃からこの地にはルター派の説教師がいた。1639年のことであろうか、プローエンという人がここの領地を取得し、改革派の宮廷説教師を招聘した。当初、この説教師はルター派の説教師と同一の教会で説教せざるをえなかったが、そのうちにルター派の説教者の死去にともない、以後、改革派の説教者が残ることになった。

ヨハン・ラインホルト・フォルスターがナッセンフーベンの説教師に就いてからおよそ2か月後、1753年11月15日、父ゲオルク・ラインハルトは亡くなった。この新任の牧師はディルシャウのフォルスター家の地所を売却した後、マーリエンヴェルダーに住む穀物・織物商人の娘、ユスティーネ・エリーザベト・ニコライとダンチヒの聖ペテロ・聖パウロ教会で結婚式を挙げた。1754年2月26日のことである。長男ゲオルクを含め、2人の間には7人の子供が生まれ育っている。さてナッセンフーベンの説教師ラインホルトの日常を明かす光景を二、三取り出してみようか。

ナッセンフーベンの単調な牧師生活に代わって、ラインホルトを慰めたのは書物から得られる学識であった。かれは猛烈な勢いで書物を購入しはじめた。かれの蔵書は増えたが、そのために父の遺産にも手がつけられた。年代学、古代史、地理学、エジプトの言語、古代の遺物、これがその頃の研究分野であった。「ここ2、3年まえからわたしも同じように、暇なときにはエジプトの言語と古代の遺物に本格的に取り組んできました」と、ラインホルトは友人ヴォイデ宛の手紙(1755.10.10.)に書いている。

自分の蔵書が息子ゲオルクにおよぼした影響について、後年ラインホルトはつぎのように語っている。「わたしたちはわたしの書斎で食事をしたし、朝食もとりました。あの子はわたしがよく読書したり、書物を利用しているのを見ていました。それがあの子に読み方を習いたいという気を早くから起こさせたのです。あの子は蔵書の書物のところへ行き、金箔押しの表題の一つ一つの文字の名称や綴りの発音の仕方を尋ねました。そうやってこれらの表題の読み方を遊びながら習ったのです。書物にはラテン語とドイツ語の2つの表題があったので、まもなく両方の言語の読み方を習ったのです。」家庭こそ幼いゲオルクの学校であったことを如実に物語る回想である。

蔵書は急増したが、当然その結果、家計は火の車であった。借金はふくれた。ラインホルトはナッセンフーベンの苦境から逃れたかった。1757年、かれはベルリン・アカデミーの数学者レオンハルト・オイラー(1707-83)に手紙で援助を求めた。かれは新設のモスクワ大学のポストを希望していたという。オイラーはサンクト・ペテルブルク・アカデミーのゲールハルト・フリードリヒ・ミュラーに推薦書を書いた。しかしラインホルトのもくろみは7年戦争(1756-63)のために中途挫折した。フリードリヒ大王の敵、女帝エリザヴェータは東プロイセンの領地をねらっていた。フリードリヒは西部で敗北を喫し、東プロイセンをロシア軍に明け渡した。プロイセンとの戦いはダンチヒ付近で一進一退を続け、1759-62年にかけて毎年、冬になるとナッセンフーベンの村もロシア軍に宿舎を提供させられた。ラインホルトはロシア軍からかれの教区民の権利と財産を守るため、その最高指揮官とかけ合い、村の負担の免除を保証させたという。ディルシャウの市長を務めた父親ゆずりの外交手腕の片鱗を示す話である。

意にそわない田舎の牧師生活のなかで、ラインホルトの楽しみは息子ゲオルクの成長であった。ラインホルトは4歳になった長男ゲオルクが自然現象について熱心に尋ねる様を見て、そこに息子の才能を予感した。父の関心を歴史と古代地理学から自然研究、特に植物学研究へと向けたのはまさしくゲオルクの自然に対する好奇心であった。後年、ラインホルトは当時を回想してつぎのように記している。

春の兆しとともに庭に現れる昆虫や未知の植物を見つけると、かれ[ゲオルク]は一つ一つの昆虫、一つ一つの花、一つ一つの鳥の名前をくわしく知りたがった... わたしは息子

の好奇心を十全に満足させてやろうと考えた。そこですぐさま徒歩でダンチヒへ行き、ペーマーが編纂したルートヴィヒの『植物の属の定義』とともに、ハレ版のリンネの『自然の体系』を、加えて大リンネの『植物哲学』を購入した。そこでわたしは改めて自然史の猛勉強を開始したのである...

ナッセンフーベン村の近隣を植物採集しながら歩き回った幸せな一時期を、父も子も永らく記憶にとどめていた。7年戦争の余波をうけたナッセンフーベンの騒然とした生活にわずらわされた時期であったが、前述のように幼いゲオルクの昆虫、花、鳥についての質問が父親の興味の対象を一変させてしまった、という。まことにほほえましい光景ではないか。

1761年12月25日、女帝エリザヴェータ(在位1741-61)が死去した。その後継者ピョートル3世(在位1761-62)はプロイセンのフリードリヒ大王に好意的な人物であり、7年戦争は和平に向かい始めていた。1743年以来、ダンチヒには「自然研究愛好者協会」があり、1760年にリンネ研究者ゴットフリート・ライガー(1704-88)が会長となり、リンネの著作は急速に普及した。ラインホルトは協会の活動的メンバーではなかったが、特にライガーとは親密な交友関係を保っていた。やがてラインホルトはダンチヒのロシア駐在事務官ハンス・ヴィルヘルム・レービンダーの知遇を得ることとなり、自然史、理論・実践農業、多くのヨーロッパの言語に対する学識により、ロシアの遠近のサークルでその名を知られることとなった。

今や、ラインホルト・フォルスターの進路は東に開かれようとしていた。事実、ラインホルトは息子ゲオルクを連れて、1765年3月5日ナッセンフーベン村をあとに、ロシアの旅へ出発したのである。その旅の目的地はヴォルガ河畔の町サラトフであった。その事情を説明するには、ヴォルガ流域のドイツ人植民地に対する女帝エカテリーナ2世(在位1762-96)の政策にふれなくてはならない。

1762年9月22日、モスクワ・クレムリン内ウスペンスキ寺院でエカテリーナ2世の戴冠式がとり行われた。周知のように、彼女は北ドイツの小貴族アンハルト・ツェルプスト家の長女として、1729年4月21日に生まれた。1763年7月、このドイツ生まれの女帝はヴォルガ流域にドイツ人の入植者を募る計画を公示した。広大な土地の約束、最初の10年間における租税の免除、多額の生活費の支給などは7年戦争で疲労していたドイツの民衆にとっては大きな魅力であった。1764年から67年にかけて約8000世帯2万7000人の入植者がヴォルガ植民地への長遠の旅に向かった。しかし目指す植民地域は人口もまばらで、その測量もずさんであり、移住者の受入れ態勢は最低のレベルにあったといつてよい。

ヴォルガ河畔の町サラトフは植民事業の中心地であった。そこの管轄庁から新住民に専制的やり方で課せられる経済的負担はときとして残酷でさえあった。そのうえステップ以外は何も見えない植民地は新たに到着した植民者をいたく失望させた。食料、貸付金、燃料はなきに等しかった。加うるに、苛酷な気候、疾患、匪賊がたちはだかった。こうした悪しき評判は風の便りにドイツの諸侯の耳に届いた。1763年、女帝エカテリーナは寵臣グリゴリー・オルローフ(1734-83)をロシアの植民地政策の責任者に任命した。ともかくドイツからの移住者の流れがその源泉で断たれてはならなかった。それを防ぐ手段としてさしあたり考えられるのは、信頼に足る人物に委託し、ヴォルガ流域のドイツ人植民地の現状報告を作成させることであった。

その白羽はラインホルト・フォルスターに立てられた。先述のレービンダーは1765年1月、ラインホルトに申し出た。サンクト・ペテルブルクにおもむき、ヴォルガ旅行の契約金額について話し合ったらどうか、前払いの450ルーブルは、もし要求額がみたされなければ、それを帰国の旅費に使ってもよい、と。ラインホルトはその申し出を受諾した。かれはゲッティンゲン大学教授ヨハン・ダーヴィト・ミヒャエーリスにつきのように書いている。「当地の帝国ロシア駐在事務官レービンダー氏より、ペテルブルクへの旅を企てるよう懇願されました...そして、そこからヴォルガ河畔とサラトフの新植民地へ向かって旅を継続し、その状態を調査するように、そしてそれから目撃証人として、ある中傷的な流言を論破するように、ということでした。この流言ははるか当地まで広まり、新植民地に関して災いをなしています。」

ラインホルト・フォルスターは1765年3月、ロシアへ旅立つさい、牧師の責務を当分、ザムエル・ヴィルヘルム・トゥルネル(1739-1806)牧師に譲り渡している。身重の妻と5人の子供たちはナッセンフーベン村の自宅に残した。ラインホルトはどこかで定職が見つければ、村に帰らず、妻子を呼び寄せようと考えていた。ラインホルトと息子ゲオルクはサンクト・ペテルブルクへ向かった。途中、経由した町では自然史の研究を欠かさなかった。ケーニヒスベルク、メーメル、そしてリガを通り、目的地サンクト・ペテルブルクへ到着したのは4月であった。さっそくラインホルトはオルローフに連絡をとり、レービンダー氏の書いた推薦状を見せた。オルローフはフォルスターが植民地調査の任務を十分に果たしうる資質を有することを見抜き、満足の意をレービンダーに書き送っている。

エカテリーナ2世の植民地政策はピョートル大帝(在位1682-1725)の領土拡張の意図を継続するものであった。エカテリーナはエリザヴェータの治世に後退した科学的実地調査を復旧しようとしていた。5月はじめ、ラインホルトはアカデミーに手紙を書き、温度計や気圧計など気象観察の器具、植物調査に必要な文献の写しを受取った。1765年5月、ラインホルトはゲオルクと政府より派遣された一人の護送士官をつれて、サンクト・ペテルブルクを出発したのである。かれらはモスクワを経由し、サラトフに到着した。5月末のことであった。かれらはさらに4人のコサック兵の護衛といっしょにヴォルガ右岸(西岸)を南へくだりドミトレフスク(今日のカムイシン)へ向かった。6つの植民地集落を訪ねたり、新たな植民予定地を調査したりした。ラインホルトはサラトフで借用したこの地方の地図をもとに、測量をつづけ、自分で地図を作成した。かれらはのちにイギリスで1768年ヴォルガ地方と植民地の地図を出版している。

一行はドミトレフスクからさらに南下し、ツァリーツィン(現ヴォルゴグラード、以前のスターリングラード)まで行き、ヴォルガ川を渡り、1765年7月にカルムック草原に着いた。今度は北東に位置するエルトン湖へ行き、製塩業を視察した。さらに北方のヴォルガ支流のイエルスラン川へ向かい、ヴォルガ東岸の植民地の調査を行った。ゲオルクはしばしば植物を採集し、リンネの書物によってその名前を調べたという。フォルスター父子の調査旅行の行程は2500マイルにもおよんだ。後年、ラインホルトはこの旅行について、つぎのように記している。

どこに行っても、その地方の土壌、植物、動物が調査された。その気候ならびに人間、動物、植物、農産物に対する気候の影響を考慮に入れたうえで、どこに行っても、わたしは入植者からかれらの境遇、利益と不利益、懸念に関してかれらの意見を傾聴した。

フォルスター父子は1765年10月末にサンクト・ペテルブルクに戻った。1766年8月にこの町を去るまでかれらはもっぱらサンクト・ペテルブルクの牧師レオポルト・フリードリヒ・アウグスト・ディルタイ(1725?-67)の家で生活した。ヴォルガのドイツ人植民地に関する報告もここで作成された。ディルタイはドイツ、フランス、オランダ人の改革派会衆のための牧師を務めていた。ディルタイの義兄弟、アントン・フリードリヒ・ビュッシング(1724-93)は聖ペテロ・ルター教会の牧師で、1762年の彼が設立した学校はロシア人と外国人の子弟に開かれ、首都で最も人気ある学校の一つであった。ゲオルクは10月、ヴォルガ調査から帰るとただちにこの学校に入学した。以後、8か月余りの間にゲオルクが修めた科目は古典語、近代語、歴史、数学、地理それに統計学であった。とくに統計学においては、後年父ラインホルトをして「マインツでの政治活動」に息子を引き入れた要因の一つと言わしめたほどの進歩ぶりであった。フォルスターのヴォルガ・ドイツ人植民地に関する報告書は1765年12月9日にサンクト・ペテルブルクのアカデミーに届いた。報告書は12月23日、翌年1月13日とつづいて届けられる。それらはアカデミーの科学者たちによりヴォルガ流域の将来の調査のために価値ある資料と評価された。新しくフォルスターの知人となった人びとのうちにはかれをアカデミーへ入会させよう、あるいは就職させようと運動する者もいた。それはしかしすべてご破算となった。

アカデミーに提出されたフォルスターの報告書の行方はいまもって分からない。ただし、後年ラインホルトが書いたさまざまな記述から一つの事実が浮かび上がる。すなわち、ラインホルトは自分の性格に忠実に行動し、事の重大さをあまり考慮せず、ヴォルガ植民地の状況に関して批判的な評価をオルローフに届けたのである。それはサラトフの当局の苛酷な処置を糾弾するものであった。それを受取ったオルローフと女帝エカテリーナはおおいに困惑したことであろう。さっそくかれらはラインホルトに入植者が従うべき一種の法典を作成するよう依頼した。ラインホルトはディルタイをはじめサンクト・ペテルブルクの学者たちに協力を求め、その仕事に取り組んだ。この法典には教会、学校教育、所有権、相続権、入植者たちの政治への民主的参加形態などの項目が扱われていた。こうした努力が実り、フォルスターは1766年5月にオルローフに法典の最終草案を手渡すことができた。

しかしオルローフがその草案をどんなに受理したか、それをフォルスターはどうしても知ることはできなかった。たとえば、朝6時に出勤せよ、と命じられ、行ってみるとけっきょく、オルローフは狩猟に出かけたことを告げられたのである。ラインホルトはこのように自分の仕事が無視されているのは、サラトフの軍政長官の仕業である、と確信していた。すなわち、報告者は抑圧された入植者の味方であり、サラトフの長官の権限をおびやかす人物であると見なされたのである、と。自分はいくまで公平に行動した。公務に就任し、俸給2000ルーブルを授かるであろう、となおも期待していた。しかし、何の音沙汰もないまま月日が過ぎて行った。ついにフォルスターはロシアを去る決意を公表した。そのときやっとな政府は重い腰を上げ、報酬はいくら要求するのか、と尋ねてきた。14か月の仕事に対して2000ルーブル、加えてナッセンファーベンの牧師職をやむなく失ったことに対して若干の補償が欲しいと答えた。政府の回答は1000ルーブルであった。ラインホルトはがん固に主張して譲らなかった。その金額に1コペイカ銅貨をプラスしてくれれば手を打とう、と。この話は平行線のまま、フォルスターはサンクト・ペテルブルクを離れた。1771

年になってロシア政府から500ルーブルがイギリスのフォルスターのもとに届けられたのみである。

オルローフはフォルスターが首都を去ると知って、かれなりに政府のモラル失墜の回復をはかろうとしたが、そうした提案はフォルスターによってかたくなに拒絶されたという。生来の正義感、上司に対する無遠慮がラインホルトのヴォルガ報告の基調をなしている。以後、イギリス、ドイツの職場での同僚との衝突もそうした反抗的気質に由来するものであった。そうした一種独特のごう慢さは元来、長く一つの土地にとどまることを許さなかったラインホルトの経歴によっても屈抑させられ、かつ増幅させられたにちがいない。

しかし、18か月におよぶロシア滞在のおかげで、ラインホルトは有力な科学者と知合いになり、イギリスへ渡るさいの紹介状を入手することができた。アカデミーの博物コレクションに親しむこともできた。ところでなぜラインホルトはイギリスへ渡ったか、その動機はいまひとつはっきりしない。1766年8月末、フォルスター父子はサンクト・ペテルブルクの東沖合にある港町クローンシュタットに渡り、ロンドン行きのイギリス船に乗る。バルト海を進み、デンマークのヘルセンゲルを経由し、カデガド湾を北上し、ノルウェーの南端の町メンダルからイギリスへ向かう。フォルスター父子がロンドンに到着したのは1766年10月4日であった。渡航費を支払ったのち、二人の懐には3ギニー半しか残っていなかった。賄い宿でぎりぎり1か月糊口をしのげる金額であったという。

2

こうして、われわれのゲオルク・フォルスターは父ラインホルトと二人でイギリスに渡ってきた。家族は依然としてポーランドで田舎生活を送っていた。かれらが一つ屋根の下に住むには、なお少しの時間が必要であった。ゲオルクがイギリスで過ごす時期はおおよそ12歳から24歳までの12年間である。多感な、そして知識欲旺盛な青年がイギリスで10余年暮らした意味は、この青年にとってとてつもなく大きかった。

ゲオルクのイギリス生活は父の生活スタイルと切り離しては考えられない。ちょうどかれの動植物に関する博物学的知識がナッセンフーベン村とヴォルガ流域での父の薫育と不可分であったように。それゆえ、イギリスにおけるゲオルク・フォルスターの生活を知るには、まず父ラインホルトの生活を叙述しなければならない。いってみれば、ゲオルクが厳格なかれの教育者ラインホルトの呪縛から徐々に解かれはじめるのは、二人が1772年7月からまる3年かけて、クック船長の第2回世界周航に随行した年月のあとであった。ふたたびイギリスに戻ったゲオルクはかれの『世界周航記』の執筆に独自の精力を注いだ。われわれは以後のゲオルクに姓を名のらせ、フォルスターと記すことにしよう。それまで、つまり1775年7月（20歳）に長い航海から帰るまではゲオルクと呼ぶことにする。

ロンドンに着いたラインホルト・フォルスターは片言の英語が少し喋れるだけであった。しかし、イギリス生活の6年間は博物学者、古典学者、翻訳家ラインホルトの名前を世に知らしめることになった。ウォリントン・アカデミーで有能な前任者ジョゼフ・プリーストリ（1733-1804）に代わって教鞭をとる力量を備えていたこと、クックの学術探検旅行に博物学者として参加することを許

されたこと、このような経歴はラインホルトがすぐれた学者であったことの何よりの左証である。ジョン・コート・ビーグルホールがこの時期のラインホルトをつぎのように評しているのは、いささか適切を欠くのではないか。

貧乏暮らしをしながら...ギリシア語や東洋の諸語の豊富な引用を織り交ぜた植物学、動物学、鉱物学、地理学に関する小冊子を出版したり... どうにかして科学者仲間のうちで名前を売ろうとしたり、パトロンと知り合いになろうとしたり—英国学士院会員とすら知り合いになろうとしたり、

あくせく働きづめの数年間であった、と。

フォルスターはフリードリヒ・デイルタイからもらった紹介状、すなわち大英博物館の補助管理人であり、司書であるアンドルー・プランタ（1717-73）宛の紹介状を活用し、ついに大英博物館助手ダニエル・カール・ソランダー（1736-73）との面識を得た。ソランダーは1760年からロンドンに住み、1764年に自然史コレクションの目録作りのため博物館に雇われた。それまでかれは10年以上、スウェーデンのウプサラ大学でカール・リンネ（1707-78）の専任助手を勤めていた。ソランダーを通じフォルスターは早くから大英博物館の所蔵品に接触する機会を得ていた。そしてフォルスターは自身の研究分野の成果や西プロイセン、サンクト・ペテルブルク、ヴォルガ流域での博物学研究に関し、ソランダーと詳細な議論を交わしたことは想像にかたくない。ソランダーは1764年英国学士院会員となり、そのころ若きジョゼフ・バンクス（1743-1820）の知己を得た。バンクスは1766年4月から67年1月にかけてニューファウンドランド水域へ植物学調査に出かけており、ロンドンに帰るまではフォルスターに会っていない。はたしてフォルスターがバンクスの邸宅に集まる科学者サークルの一員として早くから認められていたか、否かは定かではない。しかし、若き学術パトロンたる野心満々のバンクスは1767年2月以降のフォルスターの活動を十分承知していたと見ていい。

ラインホルトと息子ゲオルクはロンドンのソハウ地区にあるデンマーク街に居を定めた。さしあたり生活費はロシア探検旅行で収集したタタール人の硬貨、化石、偶像、写本、工芸品などの売却でまかなった。ロシア政府に対し未払い金の請求をつづけることも忘れなかった。多くの時間はヴォルガ旅行のさいの調査をまとめるために費やされた。このロシア旅行のときおこなった調査報告はロンドンの考古学協会に紹介されることとなり、ラインホルトは1766年11月27日、考古学協会の名誉会員に推挙され、翌年1月22日には晴れて名誉会員に選ばれた。こうしてラインホルトは協会の会合への出席の機会や自分の論文を公表する機会をとらえ、イギリスに来て5か月もたたぬうちに、ロンドンの科学者のあいだに自分を印象づけることに成功した。

1767年のはじめには、ラインホルト・フォルスターの名は英国学士院の注意をひくところとなった。その年の2月25日にフォルスターは学士院のためにラテン語論文「ヴォルガ川の自然史の実例」を仕上げている。それは学士院の書記エマニュエル・メンデス・ダ・コスタ（1717-91）によって「ヴォルガ川の自然史」と題して、抜粋・英訳された。ヴォルガ川流域（北緯48-52度）の地形学、地理学、土壌、排水法、気候に関し、広範に調査したのはフォルスターが最初であった。岩石、化石、石化物にはじまり、エルトン湖の岩塩層と組合事業、そして動植物と叙述はつづく。ただし、当代の探検家、植物学者ペーター・ジーモン・パラス（1741-1811）はこのフォルスター

の『ヴォルガ川の自然史の実例』に対する批判を執筆し（1778年8月）、イギリスの友人である著名な博物学者トーマス・ペナント（1726-98）にそれを送付している。パラスは1773年6月から1774年4月にかけて、フォルスターが踏破した地域に滞在しており、気象や陸水学の詳細な実験を行い、基礎的な季節の変化を観察することができたわけである。

1767年の中ごろ、ラインホルト・フォルスターはロンドンの考古学協会の会合に常時、出席していた。息子ゲオルクは5月21日の会合のさい、一同に紹介されている。この席上、協会はミハイル・ロモノーソフ（1711-1765）の翻訳の献本に対し、ゲオルクに謝意を表明している。ゲオルクはイギリスに到着するとすぐ、ロモノーソフの『ロシア小史』をロシア語から、父の助けを借りながら英訳したのであった。翻訳は英語とロシア語の勉強に役立ったという。ロモノーソフはフォルスター父子がサンクト・ペテルブルクに到着後、まもなく没している。フォルスター父子はロモノーソフをロシア啓蒙主義の代表者とみなし、その著作を高く評価していた。それにしても13歳の少年がわずかの期間のうちに、よくロシア語と英語を習得し、ロモノーソフを英語に訳したものである。かれの語学才能と精進ぶりには、感嘆あるのみである。父フォルスターは1767年6月4日の会合に出席しているが、それが最後になった。その月にかれはウォリントン・アカデミーの教職を取得したからである。

このアカデミーについてひと言、説明しておこう。ウォリントン・アカデミーの存続期間（1757-86）は短かったが、イギリスにおける数少ない自由主義的学校であった。当時は活気を失っていたオックスフォードやケンブリッジ大学に追いつかんばかりの勢いを、この非国教派の学園はもっていた。カリキュラムは近代的、経験的、進歩的であった。歴史学、地理学、現代語、自然史、経験哲学が教授され、アイザック・ニュートン（1642-1727）と博物学者ジョン・レイ（1628?-1705）の著作がしばしば読まれた。このアカデミーは自然科学、医学、政治の分野に傑出した人材を送り出していた。それはオックスフォードやケンブリッジから締め出された子弟を受け入れる一地方大学のレベルを越えていた。教員層も錚々たる人物が招聘されていた。その一人、人文学者ジョゼフ・プリーストリは1761-67年のあいだ、このアカデミーのチューターを勤めている。1767年のはじめ、プリーストリはアカデミーの俸給では家族を養えなくなり、ヨークシャーのリーズ大学へ移ることになった。その後任に、すでにロンドンにおいて学問的名声を得ていたラインホルト・フォルスターが推薦されたわけである。1767年6月25日のアカデミー評議員会はフォルスターを現代語と自然史のチューターとして承認したのである。評議員会はフォルスターを「英語を非常に知性的に書き、話す」ことのできる「物腰の柔らかい」人物である、と称えている。もとよりフォルスターは碩学プリーストリと比べるべくもないが、広範囲な学問分野に通じていたため、職責をそつなくこなすことができよう、と期待されたわけである。一方、息子ゲオルクはロンドンのレーヴィン商会で、その外国語能力を高く買われて、見習い修行中であった。商会の要請もあり、ラインホルトは息子をロンドンに残し、1767年7月にウォリントンに到着した。アカデミー評議員会の事務官ジョン・セドン（1725-70）の歓迎を受け、骨休みしたラインホルトはポーランドの寒村から妻ユスティーネと6人の子供を呼び寄せた。かれらはロンドンでゲオルクと合流し、9月にウォリントンへやって来た。2年半ぶりの家族の再会であった。ロンドンの徒弟期間中、結核を患って体調の思わしくないゲオルクは勤めをやめて、ウォリントンで過ごすことになった。

ラインホルト・フォルスターはウォリントンでトーマス・ペナントというよき理解者を得た。ペナントは広く内外の科学者の人脈に通じた人で、フォルスターの才能をいち早く認めていた。1768年の夏の休暇に始まるペナントとの交友はきわめて生産的なものとなった。かれらはいくつかの旅行記の翻訳について協議した。後年、ラインホルトは3人の旅行記、すなわち「リンネ博士の使徒の3編の紀行」(ラインホルト・フォルスターよりペナント宛、1768.10.17.)の英語版の翻訳をロンドンで出版することができたのである。すなわち、ペール・カルム(1716-79)の『北アメリカへの旅』(2巻、英語版の出版年は1770-71)、ペール・レフリング(1729-56)の『イスパニア・南アメリカ紀行』の抜粋(英語版、1771)、それにペール・オスベック(1723-1805)の『中国と東インドへの旅行記』(2巻、英語版1771)である。英語、フランス語、ロシア語、ドイツ語を自由に操る力量を備えた息子ゲオルクが主要な翻訳の重責を担い、父ラインホルトは自然史を編成し直したり、最新の知識をつけ加えたり、やっかいな仕事にかかわったという。ウォリントン時代とそれにつづくロンドン時代の、この翻訳の仕事は父ラインホルトの博識のみならず、10代半ばのゲオルクの語学の才能を世に知らしめたのである。

フォルスターのウォリントン滞在は1767年7月から1770年11月までの3年数か月であった。1768年ラインホルトは『自然史』の著作を計画していたが、ウォリントンには関係文献が不足していた。自然史の研究には先人の研究が不可欠である、とラインホルトは嘆いている。それに加えて、大家族をかかえての家計は楽ではなかった。1768年の秋は苦難の季節となった。収入を得るためにラインホルト・フォルスターはウォリントンの北方、3~4マイル離れたウインウィック村にある、グラマースクールで週3回フランス語の授業を担当することにした。父みずからは上級クラスを担当し、息子ゲオルクは下級クラスを教えた。暇があれば、ラインホルトはウォリントンの周辺を歩き回って、珍しい昆虫や植物を採集していた。ウォリントン・アカデミーの規律を欠く学生に手を焼いていたラインホルトにとって、博物学の研究は心の慰めともなった。

学生たちの規律は憂うべき状態にあった。1769年1月26日、アカデミーの評議会はこの件を審議するために臨時に会合した。ひたむきにアカデミーを退廃から守ろうとする学長セドンは何とかして学内の規律を回復せねばならぬ、と焦っていた。多くは非国教徒の同僚たちは節度を重んじ、ともすれば放縦な言動に走るラインホルトはかれらにはなじまなかった。1769年1月から4月のあいだに、ラインホルトはアカデミーを辞職するよう勧告されたのである。辞職を求められたのはラインホルトのいくぶん粗暴な性格だけに、その原因があったのであろうか。セドンにとって、ラインホルト・フォルスターがアカデミーの外でフランス語を教えていたのはしゃくの種であったし、またかれのクラスの風紀を乱す学生たちを勝手に処置していたのも不満であった。しかし何よりも深刻であったのは、セドンがラインホルト・フォルスターという人間をよく知らなかった、ということであった。セドンはフォルスターに解雇を通告した。1769年の(通常は6月に開催される)ウォリントン・アカデミーの評議会はフォルスターが学外でフランス語を教えていることを不満とし、かれの解任を決議した。かれは1769年6月末の学期末まで教壇に立ち、「昆虫学講義」を仕上げた。

1769年11月にラインホルトは家族とともにロンドンに戻った。ラインホルトはふたたびロンドンの考古学協会との関係を取りもどし、1770年12月から1772年6月までまじめに協

会の集会に出席している。ラインホルト・フォルスターをロンドンの学界に再登場させた人物として、デインズ・バリントン（1727-1800）を忘れてはならない。考古学協会の副会長であり、また王立協会（ロイヤル・ソサイティー）の副会長でもあったバリントンの推薦により、ラインホルトは1772年2月27日、英国学士院の特別会員に選ばれた。当時、ラインホルトは博物学者として、あるいはさまざまな航海記の翻訳者として知られ、その著作はロンドンの学術雑誌において、好意的に論評されている。ラインホルトはクックの第1回世界周航（1768.8.-1771.6.）に参加したバンクスとソランダーに熱い視線を送っていた。かれは1771年に刊行された自然史に関する著作を二人に献呈することもいとわなかった。すなわち、バンクスには『北アメリカの植物相』を、ソランダーには『昆虫の新種』を献呈したのである。

1772年の前半にラインホルトは王立協会の依頼でハドソン湾の自然史に関する論文を3編執筆した。ハドソン湾会社の総督がセヴァーン川流域の魚類、鳥類、哺乳類のぼう大な標本を王立協会に贈呈していたのだ。これらの標本の研究により、ラインホルトは博物学者としてクックに同行して任務を果たす能力を示したのであり、息子ゲオルクのスケッチもそのスケッチ画家としての技能を証明するものであった。

1771年11月イギリス海軍省は、第2回世界周航を遂行すべく、レゾリューション号とアドヴェンチャー号の艦装をクックに委任した。クックの第2回世界周航に参加したバンクス卿は第2回の世界周航にも同行するつもりで、科学者、画家をはじめとする多くの側近を引き連れて出発する準備をしていた。しかし、1772年5月18日までにクックと海軍省は、レゾリューション号が長期の航海に耐えられるようにと、余分の個室を撤去する方針を定めていた。これにつむじを曲げたバンクス卿の怒りの激しさは想像にかたくない。

1772年5月26日、ラインホルト・フォルスターはチャールズ・アーヴィングなる人物から、バンクスの代わりにレゾリューション号に乗って南洋の探検に出かけないか、とはじめて打診を受けた。翌月、バンクスはおのれの計画の挫折をはね返すべく、下院における自分の勢力の動員を開始した。しかしフォルスター側はバリントン、海軍省ならびにサンドウィッチ卿（1718-92）、王立協会のおとしを受け、最終的にはレゾリューション号での探検切符を手にしたのである。6月11日、ラインホルトは日誌に記した。「この日よりわたしははじめて自分が国王によって探検隊に任命された、とみなすことができた」と。6月17日にラインホルトは1795ポンドを受取り、20日にすべての行李をレゾリューション号に積みこんだ。かれはプリマスでレゾリューション号に合流すべく、26日にはロンドンを出発し、28日にはかの港に到着した。

Georg Forster (1 , 2)

Katsumi Funakoshi

Der Verfasser versucht, eine Biographie Georg Forsters (1754-94) im Abriss zusammenzusetzen, indem er, eine einseitige Beschreibung vermeidend, möglichst vielfältig seine Lebensgeschichte verfolgt. Deshalb behandelt er Forsters Tätigkeit und Leistung nicht thematisch, sondern biographisch. Dadurch, glaubt er, wird am Ende vielleicht ein Gesamtbild Forsters, aus den Charakteritischen als Naturforscher, Aufklärer und Revolutionär bestehend, herausgearbeitet. "Georg Forster (1, 2)" in diesem Heft enthält Forsters Lebensabschnitt von seiner Geburt (die Geschichte von seinen Vorfahren und seinen Eltern einbegriffen) bis zur Ankunft in Plymouth in England für Cooks zweite Reise um die Welt.